香川の医療最前線 265

キナシ大林病院・呼吸器内科部長　川上由佳氏

気道炎症抑制へ吸入薬

症状慣れずに継続使用を

ぜんそくの長期的治療

日本には約500万人のぜんそく患者がいる。慢性の疾患だが、治療を続け、健康な人と変わらない生活を送っている人も多い。ぜんそくとの上手な付き合い方について、キナシ大林病院呼吸器内科の川上由佳部長に聞いた。

―ぜんそくの症状は。

せきが出る、「ゼーゼー」といって苦しい、たんが絡む―などが代表的な症状。気道に炎症が起きて過敏になり、気温の変化やハウスダスト、たばこの煙などの刺激を受けて発作が起きる。乳幼児の割合が高いが、中高年で初めて症状が出るケースも多い。原因が複雑な病気で、血液検査を行ってもアレルギーの原因を特定できないことがしばしばある。

◆かわかみ・ゆか　1991年徳島大医学部卒。香川大医学部付属病院、国立療養所高松病院（現高松医療センター）などを経て、97年からキナシ大林病院。2007年から現職。15年から同院理事長。日本呼吸器学会専門医、日本内科学会総合内科専門医。医学博士。高松市出身。48歳。

ハウスダスト、ペットの毛のほか、風邪やインフルエンザ、疲労などが刺激になって気道が狭くなり、空気の通り道が細くなって症状が出る。吸入ステロイド薬による治療をしっかり続けることが重要だ。

―患者が心掛けることは。

―どのように治療するのか。

何よりもまず気道の炎症を抑えることが大切。そのための力強い味方が吸入ステロイド薬。吸入薬は気道に直接薬が届くため、少ない薬量で済む上、飲み薬や注射と違って全身性の副作用がほとんどない。ただ、即効性はなく、1カ月ほど続けないと効果が現れないぜんそくが理由でさまざまなことを諦めなくてはならない生活から開放される。

―一度症状が治まれば、その後は治療しなくてもいいのか。

症状がないだけでは良い状態とは言い切れない。症状が治まっているときでも気道には炎症が残っている。炎症があると、たばこや線香の煙、冷たい空気や症状があることに慣れてしまっている方がいる。「ぜんそくだから、せきが出たり『ゼーゼー』いったりするのは当たり前」と考えたり、発作が起きないように運動を我慢している方もいる。ぜんそくの治療は進歩しているので、もう一度、自分の症状と向き合い、かかりつけの医師に相談してほしい。

―ぜんそくによく似た病気もあると聞く。

たばこが原因で肺機能が落ちる「COPD（慢性閉塞性肺疾患）」だ。長年にわたって喫煙してきた年配者が発症することが多い。COPD患者の3～4割がぜんそくを併せ持っているともいわれている。

―治療法が違うのか。

COPDだけの場合と、ぜんそくを併せ持っている場合とでは薬も変わってくる。両方の疾患があると肺機能が落ちるスピードも速くなるので、状態を早期に把握することが大切。また、せきや「ゼーゼー」という症状は、肺炎や肺がん、結核など他の病気の可能性もある。「大したことはない」と思わず、症状をしっかりと医師に伝えてほしい。

ぜんそく患者が注意するポイント

- 症状がおさまっても、吸入ステロイド薬をすぐに中止しない
- どんな時にどんな症状が出るのかをしっかり医師に伝える

■ キナシ大林病院呼吸器内科

医師は常勤1人、非常勤2人で診療に当たる。ぜんそく患者は年間約230人が受診。

所在地：高松市鬼無町藤井435－1
電　話：087（881）3631
http://www.obayashihp.or.jp/